

はじめに

「サブカル」の終わりと 「批評」の始まり

「クリスタルか……。ねえ、今思ったんだけどさ、僕らって、青春とはなにか！ 恋愛とはなにか！ なんて、哲学少年みたいに考えたことってないじゃない？ 本もあんまし読んでないし、バカみたいになって一つのこと熱中することもないと思わない？ でも、頭の中は空っぽでもないし、曇ってもない

よね。醒め切っているわけでもないし、湿った感じじやもちろ
んないし。それに、人の意見をそのまま鵜呑みにするほど、単
純でもないしさ」

これは、田中康夫『なんとなく、クリスタル』という1980
年に書かれた小説の登場人物のセリフから引用した言葉です。
そして、この本のあとがき（新潮文庫版）で田中氏は次のよう
にも書いています。

「どういったブランドの洋服を着て、どういったレコードを聴
き、どういったお店に、どういった車に乗って出かけているか
で、その人物が、どういったタイプの人物かを、今の若者は判
断することが出来るのです。人は、年齢に関係なく、みな、そ
うした他の力を借りて、自分自身を証明しているのです」

これらの言葉のなかに、僕は、80年代という特殊な時代に発
生した日本の「サブカル」と呼ばれていた文化を説明するの

に必要な要素が詰まっていると考えています。そして、『なんとなく、クリスタル』という小説は、岡崎京子の『リバーズ・エッジ』以前の初期作品群『東京ガールズブラボー』などと双壁をなすように、『サブカル』についてうまく表現した作品ではないかと思っています。

さらに田中氏は『なんとなく、クリスタル』のモチーフについて、「今までの日本の小説に描かれている青春像とは違う、皮膚感覚を頼りに行動する、今の若者たちが登場する小説を書きたい」と書いていました。この「皮膚感覚」というニュアンスが、「サブカル」という文化において何よりも重要だったような気がします。「だった」と過去形で書いたのは、「サブカル」という文化がすでに終わったものと考えているからです。

このリトルマガジン「なんとなく、クリティック」は、80年代的な日本の消費文化Ⅱ「サブカル」をテーマの一つにしたいと考えています。また、80年代「的」と書いたのは、それが80年代という形式的な区切りによってくつきりと様変わりしたわけではないからです。

そして、僕が考えるに、「サブカル」は「サブカルチャー」とは別の文化現象だった気がします。「サブカルチャー」は「メインカルチャー」と比較した時の「サブ」になります。が、「サブカル」において「メインカルチャー」の存在はさして関係なく、メジャー／マイナーという区分けにおける「マイナー」なカルチャーを指向することが「サブカル」だったと思います。もちろん、マイナーなものだったとしても「サブカル」に分類されるもの、されないものがあるのですが。

メジャー／マイナーとは、さまざまな要因によつて刻一刻と変化する不安定な分類です。つまり、その時々時代の空気感を踏まえ、世界（カルチャー）のコード（流行のようなもの）を「皮膚感覚」で読み解くゲームが「サブカル」だったのではないのでしょうか。その「サブカル」に終わりを告げたのが、90年代後半、インターネットの普及だったように思います。音楽、映画、ファッション、アートetc：多様なカルチャーを横断していた「サブカル」という文化は、インターネットの登場によつてすべての文化がたこ壺化してしまった状況のなかでは、

過去の遺物になってしまいました。

そこで本誌のもう一つのテーマにしたいのが「批評」です。たこ壺化したそれぞれの文化を横断的に捉え、新たな「視点」を提示するのが「批評」の大きな役割の一つではないでしょうか。そして、「サブカル」がマイナーで未知なものとの出会いを促す文化だったとしたら、「批評」は——未知なものなんてなくなつた世界で——既知なものについての新たな「視点」を提示し、「未知」として出会わせるゲームのようなものだとも思います。

「サブカル」という終わってしまった文化について思いを馳せながら、それに代わる「批評」の可能性を探る——。そんなことを密かに考えながら、このリトルマガジン「なんとなく、クリエイティブ」を作つていければと思います。